

翻刻『悪源太平治合戦』（上）

翻刻の会

一、底本には大阪府立中之島図書館所蔵の七行九十丁本を用いた。

二、底本を忠実に翻刻することを原則としたが、次のような校訂方針に拠った。

- 1 本文は文字譜を手掛かりにして、適宜改行を施した。ただし、道行・景事の類、会話の途中等では改行しなかった。
- 2 各丁の表・裏の終わりは、丁数の数字とオ・ウの略号を（ ）で示した。
- 3 仮名は現行の字体に統一した。ただし、感動詞、送り仮名、捨て仮名の類以外の、本文中の「ニ」「ハ」「ミ」は「に」「は」「み」とした。

4 漢字は、一部の異体字を除いては、原則として通行の字体に統一した。

5 漢字・仮名ともに、誤字、脱字、当て字、仮名遣い、清濁は底本の通りとした。

6 特殊な略体、草体、合字等は現行の表記に改めた。

7 畳字は、平仮名は「ゝ」、片仮名は「ッ」、漢字は「々」に統一した。ただし、「く」はそのまま残した。

8 文字譜の類はすべて採用し、本文の右傍の適切と思われる位置に翻字した。

三、本文の翻刻は、次に掲げる翻刻の会（学部学生の研究会）の会員によってなされた。

金子友香里、木村美咲、楠本真巳、高岡令佳、田山幸恵、冨澤えり。

文字譜、改行及び本文の最終確認は山田和人が担当した。

本作には、人権に関わる用語が認められる。資料的な性格を考えて原本の通り翻刻したが、人権問題の正しい理解の上に立って活用されることを願いたい。

（山田和人）

遠州夜啼石 山州奴茶店 悪源太平治合戦 豊竹越前少掾直伝

国家こくたの興廢こうはいは時運じゆんの乗除じやうじよにより。人機じんきの得失とくしつに出て成敗せいばい榮辱えいじよく人を殊ことにす。時は平治元年臘月中旬らうげつちうじゆん。左馬頭さまた義朝かみたち藤原ふじわらの信頼のぶよりが謀叛むはんに与よし。都みやこの騷動さうどう斜ななめならざれば。急いそぎ静しづめよとの院宣いんせんによつて。安芸あきノ守平かみたいらノ清盛きよもり。二条大宮ふたじょうに陣ちんを取り。四門しもん鉄桶てつとうのごとく取り囲かこむ。旗手はたて雲井くみに翻ひるがへすヲロシヘ夜軍よぐんの備そなへぞ。嚴重げんじゆうなる。清盛きよもり(一オ)中央ちゆうちゆうの床机しどうきにかゝり。百度もたげ戦たたかつて百度もたげ勝かつは。戦せんの戦せんならざる物といへ共。天眼てんじん人和じんわを的めとせば。百戰ひやくせん百巧ひやくこう一挙いつきよに有う事運じやうに乗じやうじ。短兵たんべいを以もつて責寄せめる所に。いまだ勝利しやうりの沙汰さたなきは心ならず旁かたがは。いかにと宣のたまへば。主馬しゆめの判官はんくわん盛久もりひさ瀬尾の太郎たろう兼康かねやす詞そを揃そろへ。所々せめの攻口せめいづれも烈敷はげしき御大将ごだいしやうに。勝すぐつたる兵共つはもの指向さしむけられ候けうへば。時刻じこく移うつさず利運りゆんの吉左右きつさうあらんは治定ちぢやう。御心ごしん安やすかるべしといまだ詞ちも終おはらぬ所ところへ。院いんの御所ごしよより知しせの使しイ。競瀧きやうたき口くちあはた、敷しきクかけ来きり。(二ウ)扱あも郁芳門うはうもんの攻口せめに向むかはせ給みたまふ通盛公とうせいこう。越中えちうの前司ぜんじ盛俊もりとし上総しかづノ介重清等しげきよ。敵てきをはかつて呼引おびき出し尖すどき刃やいば火花しゆけをちらし。須臾しゆゆもたゆまぬ働はたらきに敵てきの軍兵ぐんべい大半たはん討うれ候けうへば。味方しやうりの勝利しやうりと見みへながら只今ただいま戦いくさひ真最中まさいちゆう。先まづッ御注進ごちゆうしん申まをさん為馳参はせさんじ候けうと。いふに清盛心地きよもりよげに打領うなづき。先まづッは吉うッ左右さう太義たいぎ。休足きんそくあれと人々ひともいさみす、みし折ふしこそあれ。南保三郎なんぼさん国連くにつらう鐙ように立たッ矢蓑やみの毛けと折うかけ。朱あけに成なッてかけ付けケ。郁芳談うはうだん天陽明門てんやうめいもん各攻口せめ敗やぶれしかど。待賢門たいけんもんをかためたる

悪源太義平。古今無双の勇力にて。(二オ) 寄手の大軍共せずかたはし抛立まくり立。或は掴んで人礫千騎万騎も時の間に。風に木の葉の飛ごとくはらりと打ちらされ。味方もあぐんで叩へたり。急ぎ御加勢下さるべしと大息。ついで訴ふれば。

清盛くはつとむくりをにやし。譬鬼神なればとて一人の義平に。ほゑ頬かいて逃廻る腰ぬけめら。聞クもいまはし。まだるい。ソレ。瀬ノ尾。透をあらせずかけ向つて攻付ケ。早く。といらたてに。畏つて兼康は数多の軍兵引具して飛がごとくに。急ぎ行。

跡に人々気をいたため。軍の安否を待つ所に。両手の士率に案内させ。難波ノ次郎経遠首桶携へしづ。御前に(二ウ) ひざまづき。待賢門の攻口敗れしかば。義朝を始め一門の輩。東国へ落行し所に。悪源太義平一チ人踏とまり。三戦神のあれたるごとく勢ひに。防支る者なかつし所に。某忠戦の鋒先を以て攻付ケ。二条川原にて討取たる此首。実檢に備へ奉ると己が手柄をしたり顔。さもいかめしげに相述べ。

盛久瀧口目と目を見合せ。いぶかしながら。適高名手柄。と器のふたを取りのくれば。清盛とつくとためすがめ。ホウ聞キ及びし悪源太が年シ格好。それとは見ゆれど誠しからず。たつた今迄手いたく働。味方の大軍倦しと。注進によつて瀬ノ尾の太郎を指向ケし間もなく。難波などに安々と(三オ) 討るべき義平ならず。殊に幼少より東国に育し若者。見知つたる者なければ猶以て心得ずと。不審詞に盛久瀧口知つてもしらぬ顔見合せ。コレサ経遠。御辺の手柄相違も有ルまじ。併君の御疑ひも去ル事なれば。義平の首にまがいなといふ証拠があらば出されよと。聞て憚る気色もなく。それはぬ

からず。かく御不審も立ッべきかと。某心付イたる故慥な証拠は。義平が帶せられし膝丸の太刀。持參致し候と御前に差
出せば。取上ケて見改め。ホウ。是は誠の膝丸なれ共。品によつて誰しにくれまい物でもなし。況や太刀かたな物いはず。
是ぞ慥に義平と。証拠に立ッ者なければ治定ならずと念に(三ウ)念。押シかへして成程慥な証人有り。朱雀の傾
城芙蓉と申ス女は。源太が都へ登し折から。馴染重ねし者なれば。御前シにおいて彼レに見せ。御シ疑ひを晴さん為親方に
申付ケ。召シ連參れと人を遣はし候と。いひもあへぬに傾城芙蓉。親方諸共參上と告る声々。ソレくこなたへ早く通せと
有ければ頓てへ御前シへ立出る。

恋の山。情の峠。ふみ分けて。公界する身も恋風は。誘ひ廊にならびなき。名にも芙蓉の花の顔盛の姿露ふくむ。つか

みからげの八文字。鎧武者の並居る中。おめず場うてぬ玉鉾は。関に育し印シなり。

難波次郎声をかけ。コリヤく女。汝は悪源太義平に。ふかく馴染を重ねし由。主人清盛公の(四オ)御前シにて。様子

包ず申上いと。聞クよりきよつと顔眺め。是はしたり。早うこい。とうこいとほの暗りから。仰山そふに呼付ケられるは。

只事では有ルまいと。胸がだくく瘡が登りや氣も登り。現の様にきて見れば。べしてもない事。源太様シに馴初た様子

をいへとは。髭口そらして能いはれた。ホ、ホ、ホ、不粹。高が男にいき付いて。なじめばいと、いとしう成り。互に

かはるな。かはるまいコリヤいはるでもした事。其外の道行は。ながい事なりやわしやつどく得覚ぬ。よし又覺てゐ

るにもせよ。それ聞て何にさんす。やばなおさんが有ルわいなと。ずつかりいへば傍から手に汗。コリヤく御前シやそ

りや何事。鹿相いはずとお尋の筋。微塵ほこり違はぬやう。(四ウ)とくく申あぎやいのと。のつ引ならぬ親方がい。そ

んならざつと咄さら成ルまい。実色里のならひとて。くがいする身の楽しみは。勤つとめの内の誠こそほんの夫婦のかたらひと。我身ワの上に覺しへしは。跡にも先マきにもたつた一人思おもひ初はじめは去年こぞの春。ふげん像ざうの桜さくらの庭見わ物群集くんじふの其中そのちに。深編笠ふかあみに對たいの大小。のつしりとした風俗からマアかはひらしい殿ぶりと。こつちが見ればあつちにも。見て見ぬふりの目遣めづいにこがれ寄ル糸縁いとえの糸。ひかれて茶やが休床やすみどし初対面しよたいめんから打とけて。しつぱりと詞をかはし互の名所。こまぐといふて別れた其夜中から。通とひ車クルマの我ワならで君キミに任まかせん恋こひの測はか。深い浅あいはどこへやらほんの女夫めせとと馴ななじみ。逢夜あふよ重かさねしかたまりがおなかに（五オ）じつと。ヤア何なんといふ。懷胎くわいたいでもしておるか。イ、エイナ。痞つつかへといふ病やまひに成なつて身を苦しめる其訳わけは。どふした事やら此比こはふつたりばつたり見へもせず。文ぶんの便りもないわいな。ホウないとて捨て置おかれぬ中。なぜわが方から尋ぬやい。ナア尋ふも行衛ぎやうゑが知レぬ。イヤサとほけな。わがしらいでよい物か。イヤなんぐの誓文せいもん。わしはしらぬが若もおまへ方が御存ごぞんなら。ちよつとしらせて下くださんせ。髭様ひげシ必頼かなムそへ。ア、コリヤぐまた慮外りよぐはい千万せんまんシな。そりや何いふと。袖引そでひて。とめる親方おやう繕つくろはぬ。芙蓉ふようが風情ふうぜいを清盛せいせいはつくぐと打眺うちながめ。ヤアぐ女を。近く参まゐつてソレ。其器うちはの中を見よと。思おもひがけなき詞ことばに指寄さしより。何心なんしんなく蓋取ふたツテヲ、こは。ヤこりやぐ。こはい事も何なんシにもない。ソレ。其首くびはそち（五ウ）が馴染なじみし悪源太義平。此難このシ波が手にかけた何なんシと。違ちがひは有あルまいがと。おとし付地ケたる詞も氣かゝり。よくく見る程。違ちがふた死顔しげん。扱つかは忠有ちゆうル御家来が君にかはつて死したるを。見みしらぬ故ゆゑの詮義せんぎよな。何にもせよ大事だいじの場所。此世このにまします夫の為ためよきに偽いつはりお命いのちを。救すくはん物と心に点くき。ナフ悲かなしやいたはしや便べんりがなくこそ道理ことわりなれ。たつた今迄いまお行衛ぎやうゑの。知しレぬを案あんじる其内そのも。ながらへてさへござるなら又逢事あふも有あル物と。思おもひし事もあだ浪なみのよるべ定めぬ身の歎なげに。浅あ

ましの御さいごやと。器うつはの前に身を投なふし消入きへし。やうにぞ泣ければ。

難う波ははいきつて出かし顔。清盛ハルも安堵あんどの思おもひ。源太げんたが首に極れば忠賞ちゆうしやうは追おつてさたせん。又。牛若うわつばといふ童わらわ。鞍馬山くらまに

忍しのび居ゐる由よし。(六才)敵せかの舛せがれなれば是以こゝつて赦ゆるし置おけず。立たこへて詮義せんぎせよ。猶なほ又また膝丸ひざの此太刀は。我父忠盛しんかう信仰しんかう有あり。祇ぎ

園おんの社やしろへ奉納ほうなすべしといひ渡し。コリヤく女を。いまく敷ふは系けい類るいせずと分わり別べせい。ソレ眼め前に源太げんたが死首しきう。見みながら

生なきては居ゐられまいがな。ホウそりやいはしやんす迄いたもない事。夫その敵喰くひ付けても此場こゝで死したい物なれど。年としの間まは儘まま

ならぬ。親方おやに任まかせた身なりやぜひがない。エ、口惜くわしい恨うらめしい。憎にくみ敵てきと尻目しりめにかけ。難なん波はを睨にらめ親方おやは。傍そばからあ

ぶく氣きの毒どくさ。モウ御用ごようもござりませずば。女をを連つれて帰かへりましよと。いふもおづく立たちはさへなまめく姿すがたかい取とり

の。夫そならぬ顔夫うにして間まを合あはせたる嬉うれしさに。心こゝろいそく打連うちして。帰かへる芙蓉ふようが花はなかほる。陣所じんじよは(六ウ)梅うめの早咲はやさき

に。勝色かついろ見みせし。凱歌かいどきの。声こゑもいさみて三重さんじようへ名なも高たかき。

いづくの人の願ねがひをば。かけ初はじめてや今爰いまにやすく生うまゐる、其文字そのふみじを。取とりも直なさず泰座寺清水子安たいざじよしみずこやすの觀音くわんおんと。称しょうして是こゝを

尊たうめり。仏ぶつ神しんの。誓ちかひの糸いとも。結むすばれて。とけぬ浮世うきよのさはがしく。参詣さんけい申まうかれくの透すきを窺うかがふねぢけ者もの。目計めけいり光ひかりる

ほくそ頭巾腰づきんこに大おほだらさすがにも。いはねど夫そと白浪うきやそろりくの足取あしとりも。驚おどろにはあらぬ昼ひる鷹とんひ迎むかひ廻まわす折しやからに。

住僧ぢゆうそう円覚えんかく仏ぶつ前ぜんの日中にちちゆう終はれば珠数じゆずつまぐり。立た出る勝かち手口てくわう。ヤア何者なにものじやと驚おどろけば。イヤ何者なにものは知しれた事。おりや盗人たうじん

の骨張こつちやう。といふて深い望のぞみもない。高たかが散錢さんせんの溜たまりと。布施ふせの有ありたけ(七才)引ひさらへていぬる分ぶんの事。サアくきり

く出でしたり。ハ、ハ、ハ、ハ。はて拟合点ていごうてんの悪あくいお盗ぬすじや。繁はん花はなの地まちの町家ちやへははいらず。精進しやうじんくさい寺廻てらまわりは隙ひまついや

し。とつと、おいにやれ。イヤいぬまい。町家へはいるは合点なれど此比の騷動で京中は上を下タ。じやによつて寺へしかけた。サアそれが大きな間違。其騷で参詣もなければ此方もかんく坊。目利が違ふて笑止千シ万シ。したが折角はいつて素口空腹でもないなれまい。責て出端で中食しそれを矩摸に。いんだらそつちはよからふがこつちの虫が合点せぬ。マア一ぺん家捜して。跡で四五はいかこふてこまぞ。茶をわかつて待つて居よと。いひつ、そこら見廻してのつかくと奥に入ル。ア、捜さばさがせ。とらる、(七ウ)物も内証の。貯。とてもあらきさんじと。独つぶくくり返す。念珠かた手に見やつたる向ふへ来かゝる。わな帽子。廿計りのぼつとり風顔もくつきり色白な。女子をつる禿頭。親仁めけ共苦有所班なかつげの撥餐。浴衣がけ成ル旅脇指さしも名高き観音の御前にしばし伏拝み。

有ル家と娘と打連して伴ひ入くる住持の傍。指寄つて小腰をかゝめ。身共は遠州諏訪野原と申所の百姓。名は天シ目の弥源次。彼れめはさめと申て一人り娘でござますが。生れ付いてぐつ共すつ共物いふ事が成りませぬ。そんなら世間に有ル通り。啞聾かといへば其くせ耳は突抜る程聞へるが。どうした事か子が一ッ疋ほしいといふて。此観音様へ宿願をかけたと有。(八才)ハテめつぼうかいな。惣体子の出来るあんばいは。女夫の中でも至極な所。陰陽和合の理屈でなけりや中々芽作る物じやない。スリヤ観音様がしらしやつた事じやない。それにむたいな願かけたら。観音様も迷惑がつて逆罰を当てさしやろ。よしにせいと呵ても兎角はしがる仕形して見せれば。頑な子が可愛ひと親の身ではいぢらしく。ひよつと観音の御利生で彼陰陽が和合して。西瓜だかへた様な腹に成るまい物でもなし。逆願ひをかけるなら居ながらよりは置キに参つて頼んだら利がよからうと思ふて。わざく連して登ました。どふぞ御祈念願しますと。ひん捻紙の十二燈指出せば。何が扱祈

念致すは畏僧が役。安産(ハウ)の守りもあれ共。申シ子の願ひにはどれ共御符をしんぜると。かたへに入て取り出し。随分とも信心有レと。渡しながら二人が顔。つくぐ眺て一ト思案。本^詞国遠州と有れば都より遥の住所。早速ながら其許に頼度^キ子細^シ有リ。何シと聞てくれられうや。ハア数ならぬ身共等にお頼とはどふした訳。身に叶ふた事ならば何成り共おしやらませと。いふに円覚^{ハル}力を得。イヤ別の事でもない。六七才の児なるが其身出家の望なれ共。二タ親是非に俗でおかんと親子の心一ツ致せぬ故。方々へ逃隠る、先キタを搜すとあれば。又尋来るも氣の毒。何とぞ住家へ連れ帰り。暫しの内かくまふて下さらば。愚僧^{ハル}が悦び此上なし。偏に頼存と余義なき(九才)詞に打領^ウき。ハリヤ何より安い事。高が坊主になさふ成ルまいの尻^ヒがきてからこはい事も何シにもない。連^リていにましよナア娘と。いへば合点と領計^ウり。円覚^{ハル}悦び。早速^{サク}の得心祝^{トクシン}致すと奥に入。隠し置^{カク}イたる牛若君。仏壇^{ぶつだん}のこかげより伴^{フナ}ひ出れば。テモ扱も器量よし。コレ此親仁が預るからは尋てきてもめつたにや渡さぬ。ちつ共氣遣^キイさしやますな。サアござりませと伴^{ハル}て立出る折こそあれ。六波羅の侍^{にやとう}イ杉田ノ藤次。若僧^{ハル}一人先^{にやとう}きに立大勢引連^シれかけ来り。ソレと一ト声かくるやいなばらくとふんごんで。捕^{とら}たくとひしめけば。コハ何事と親子は仰天。かけもかまはぬこちとが狼狽。怪我^{けが}が有ては成ルまいと。娘引連^リれとつつかは跡^{フシ}をも見ずして逃帰る。(九ウ)

藤次^{ハル}声かけソレ者共。牛若^ウ通すな引く、れ。畏^{かしま}つたとかけ寄れば円覚^{ハル}先^{ハル}きに立ふさがり。牛若^ウの馬若のとめつそうなお侍^{ハル}イ。そんな者はこつちにぬ。外^{ハル}を詮義^{せんぎ}といはせも立ずあらがふまい。コリヤ其証^{しやうこ}拠^こは鞍馬山^{くらま}でよう見覺^{かんかく}へたる厳光坊^{げんくわう}。遁^{のが}れはない牛若渡せ。ソレ搦^{からめ}よの声につれ大勢^ウ一^チ度に寄ル所を。心得^{ハル}たりと牛若丸も守り刀を拔持^{ぬき}ッて。切払^ウふたる小人^{せうじん}の。

天性備はる劍術勇氣。円覚も禪おつ取り無二無三に抛立れば。さしもの大勢叶はじと麓の方へ逃けて行。

立戻つて若君をいづくにか隠さんと。うろく見廻しホウ究竟の物こそ有れと。散銭箱の蓋押し明ヶ若君忍ばせあつたふ

た。しめる間もあらしこ(十オ)捕手引連して。藤次蔽光取つてかへし。円覚が両の手をこりや遁さぬとしつかと取り。サ

ア牛若はいづくにおる。隠した所へ案内せいと引立る。イヤサ今の騒動にどつちへ逃ヶたる愚僧はしらぬ。ヤアしらぬとて

濟そふか。うせいくと引立て。奥の間客殿くりめんさう。ばつたくとかり廻す。

庭の隅より仏前シの盗人。そつと立出散銭箱。やつちやしてこいよいもふけ。忝しとひつかたげ。脇目もふらず一筋道急

ぎてこそは。三重へ名にしおふ。

相坂の関と申すは日本シ四関の第一にて。要害堅固に備へたる主馬判宮盛久が山館。守り蔽敷二三の木戸。廻りに兵具

立テならべ風も通さぬ構なり。

遠見の役寝ずの番。一ト時かはりの時計に合せ。難シ波ノ(十ウ)次郎経遠が郎等杉田ノ藤次。主人に先キ立チ番所にかゝり大

帳扣へ。ヤア者共。当時平家の権勢尖く。洛中の軍を鎮め敗北したる源氏の奴原。ぬけく東国へ逃ヶ下らんと。或は

願シ人シ商人など。往来は男女に限らず。帳面に記すへしと院の庁の嚴命。随分油断仕るな。先ツ往来を通せよと。下知に

従ふ下モ部共木戸を開いて呼出す。御免候へ私は下モ立売りの小間物や。築地のお出入又撰家方。親王姫宮比丘尼御所。と

こも軍がはやるやら。お召シなさる。道具には先ツ甲がけ鎧形。弾輪ちがひ花うつば喜悅の。眉掃鉄奨筆。お奴方は油

墨。真狐の黒焼黒元結。其外数々近江路へ罷りこしさげさせる筒。召シま(十一オ)せいとぞ売て行。跡へさがるは嵯峨の

者。戴入送つて伊吹山。一ト目二タ日のさし艾。三里の先きは程近しと名乗て廻る時鳥。次に見へしは俗山伏。順逆わかぬ斎料に錫杖ふつていかめしく。さすが巫やら出ツ家やら衣を着たは鉢たゝき。頭巾の下は撥髪奴。日向生れの伊勢参り。作染浴衣一チ様に。波間の月を三井寺へ。礼を納る順礼や。車遣は鳥羽の者。しるもしらぬも相坂は。木の丸殿にあらね共。名乗つてこそは通りけれ。

杉田は一チ々書キ留め。盛久殿に伝へと下モ部引具し立て行。実守り人の。隙もがな。人目の関を盛久の秘蔵娘の常世姫。誰に心を奥の間の遠見の亭に立出て。袂より一チ軸の掛地取出し柱にかけ。香をくゆら(十一ウ)せ合掌の念殊に余る涙の色。袴の幾重もしめやか成ル秘共声々に。是はしたり常世様。いつの間におはづし。取り分けて此比はうきく共なされぬ故。琴三絃でいさめても。間がな透がな爰へ来て。何なさるゝと指覗き。是は扱守り本尊の御絵でもなし。彩色した浮世絵。美しい前髪が馬に乗つて居る所。此掛絵にしみぐと涙ぐんでござらしやるは。どふした事と尋れば。姫も涙の顔を。恥しながら此掛絵が。自が思ひの種。源氏の大將義朝様の御惣領。義平様のお姿ぞや。去年の春鎌倉より都へお登有りし時。馬上ゆゑ敷キ供廻り都入のはなやかさ。其折から自も。此亭よりふと見初天晴御器量殿ぶりやと。思ひ初メても片便り。(十二オ)文して申さん伝もなく。せめてお姿計りなと肌身にそこへて起臥の。夢の間々の楽しみとくる月の徒に。源氏の運の拙くて待賢門の軍も破れ。親子御共にちりぐの中に床敷キ義平様。難波ノ次郎が手にかけて討しと聞クより気も落て。夜ル昼わかぬ憂思ひ今では是を筐共。ウケ暮レ忍んで此様に。御回向申て居る内も心が心に通じなば。必未來は夫婦ぞと思ふて給はれ義平様と。掛地を身に添いだきしめ声をも。立ず伏しつめば。お道理様やと諸共に女

の情の囁ひ泣。跡は笑ひを催して俱に機嫌を取り々に。難波次郎経遠様。只今お出としらす声。ソリヤ又毛虫が来たといひ。お姫様見ら（十二ウ）れぬ様に。サアくちへと打連して一ト間にへこそは入にける。

程なく時計の八時半時。間クより入来る難波ノ次郎。盛久も出迎へば。先刻より嘸お待ち遠。先達ッて雑兵歩徒の者は。

関所違變なく通すやうに仰渡されしか共。或は名有ル武士共。雑兵なんどに紛れ通るまい物でもない。雑兵駈武者成り共半時一ト時とゞめ置き。急度吟味致すべしと改めての御詮。其旨心得らるべしと。いふに盛久打点き。尤の御裁配委細承知仕ると。挨拶央へ関守りの目顔を忍ぶ雑兵二人。陣笠眉深に來か、れば。

下モ部共声をかけ待テよくと留める内。難波ノ次郎つくぐ見廻し。何国より何方へ通るやつ原。国所名苗字を明イ白に申せ。子細なくば通して（十三オ）れうと咎られ。先成ル男両手をつき。うららが在所は美濃の大垣。奉公林に登たれば思ひも寄ぬ軍がおこり。一日を二百宛あつち飯にあつちの鎧。えい／＼おうに雇れ物二日と立ぬ内。源氏方の負に成り日雇賃には此鎧。迎都の住居はならず。古郷へ錦を思ひ出し此儘で帰ります。お通しなされ下されといふを打けしならぬ。今日より念を入。雑兵にもせよ半時一ト時留め置き。吟味せよと厳しき仰。今鳴ッたは八時半時。暮レ六つ迄

待ちおらふと。睨ちらせば盛久ひつ取。わが云訳は聞へたが。今一人は何国の者。見ればまだ若輩なやつ。身は盛久とい

ふて当所の関守。今難波殿申さる通り御上意なればもだしがたし。我国所早ク（十三ウ）申せと。いへ共とかく指辰き。

答なければ。イヤあの男もひとつの在所。一ッしよに連立参つたれどあいつには年寄ッた母親がござります。夫レを養ふ為

なれば一ト足も早ウ帰り。顔が見たいと申せば孝行といひ不便も有。爰は了簡遊ばされ私一人留置カレ。彼めはお通し下さ

れいと。願^{地ハル}へど聞^ウぬ難波^中ノ次郎。理非^{ハル}を分^わぬも関所^ウの掟^{おきて}。盛久^{中ウ}は氣の毒^{どく}ながら力^ウ及ばずもつけ顔^{ハル}。詮義^{せんぎ}を脇^{わき}へちらさんと。
詞
イヤなふ難波殿。いまだ貴公^{きこう}には妻女^{さいよ}もなく独身^{どくしん}と承^うる。幸イ盛久^{中ウ}が娘常世^{とこよ}と申^ます者お氣に参^まらふか存^{ぞん}ぜね共。婦妻^{さい}に迎^{むか}へ
下^{くだ}されなば拙者^{せつや}が本^もシ望^{もう}。当家^{さか}侍^{さむらい}分に誰^{たれ}有^あふ。肩^{かた}をならぶる者もなき貴殿^{きでん}シ。(十四才) 承引^{せういん}なされ下^{くだ}されまいかと。
地^{地ハル}ハル
あがまへ詞^しに付^つ上^{じやう}り。是^こは御挨拶^{おあいさつ}。此度^{このたび}の軍にも鬼神^{きとん}と呼^よれし惠源太^{えげんたい}が首^{くび}取^とつて。日本^{にっぽん}に名^なを頭^{あたま}はし。院^{いん}の御所^{ごしょ}を始^はメ
我君^{わがきみ}の感状^{かんじやう}にも預^{あづか}つたる某^{たれ}。聶^{しやう}に取^とられても不足^{ふそく}は有^あるまい。貴殿^{きでん}も盛^もの一字^{いちじ}を給^{たま}はり御公達^{ぎんこうだち}の後見^{こうけん}もなさるれば。舅^{しやうと}と
敬^{うやま}ふても人の笑^{わら}はぬ事。併^{しか}侍^{さむらい}の女房^{にようぼう}はみめ像^{かたち}より才覚^{さいかく}が第一^{だいいち}。すはといふ時はお馬^{うま}の先^{さき}にすゝみ。雑兵^{ざうへい}の首^{くび}でも
取^とル程^{ほど}の覚^さがなくては武士^{ぶし}の妻とは申^まされぬ。勇者^{ゆうや}は種^{しゆ}に頭^{あたま}はすとやら貴公^{きこう}の育^{そだ}がらといひ。奥床^{おくどま}しう存^{ぞん}る。が美^うくしい
器量^{きりやう}より心の器量^{きりやう}は何^{なん}とでござるな。承^うはつた上の事^{こと}と。寝耳^{ねみみ}に水^{みづ}の底意^{そこい}には笑^{わら}を。隠^{かく}して落付^{おちつけ}キ顔^{かお}。是^こは御尤^{ごより}。(十四
ウ) 子は嬰孩^{えいがい}より教婦^{おしへふ}は始^はめて教^{おし}とあわ共。大まかな爺親^{て、おやそだちつゝい}育終^{かくしゆう}に彼^{かれ}めが心^{こころ}は様^{よう}さず。ヤ幸伊^{しやうい}の事^{こと}こそ有^ある。常世^{とこよ}を是^こへ呼^よ
出^でし彼^{かれ}等^ら二人^{ふにん}か詮義^{せんぎ}を致^{いた}させ。才智^{さいち}の程^{ほど}を試^{こころみ}まいと。いへは図^ずにのる誰^{たれ}彼^{かれ}ノ次郎^{じやうら}。重疊^{ちゆうさう}く上^{じやう}分^{ぶん}シ別^{べつ}。然^{しか}らば互^{たがひ}に休^{やす}
足^{そく}かてら。詮義^{せんぎ}の仕様^{しやう}を見^みン物致^{ぶついた}さん。万^{マン}事^じは後刻^{ごこく}と言^い捨て番所^{ばんしよ}を。立^たつて入^いにける。
詞
ヤア誰^{たれ}か有^ある。娘^{むすめ}にこよと呼^よつがせ。立^た出る。常世^{とこよ}姫^{ひめ}。父^{ちち}か前^{まへ}に手^てをつけば。ヲ、呼^よ出^ですは余^あの義^ぎでない。子細^{しさい}有^あつて彼^{かれ}
等^ら二人^{ふにん}が詮義^{せんぎ}をゆづる我^{われ}レにかはつて仕^しれと。思^{おも}ひがけなき仰^{おほ}に恠^{ひつ}り。父^{ちち}上のつがもない。女子^{むすめ}同士^{どうし}でも有^ある事^{こと}か。男御^{おのみ}の
詮義^{せんぎ}するに姫^{ひめ}ござのあられもない。此^こ義^ぎは御免^{ごめん}シと諾^{うな}も聞^きずそふ有^あふ(十五才)と思^{おも}つたれ共。武士^{ぶし}の娘^{むすめ}は武士^{ぶし}の夫^{つま}に添^{そは}
ねばならぬ。そちも名^な有^ある侍^{さむらい}に娶^{めあ}せんと早^{やく}約^{やく}束^{そく}致^{いた}したれば。兎角^{とかく}はない娘^{むすめ}が賢愚^{けんぐ}の程^{ほど}試^{こころみ}たい。ヲ、いかにもと請^{こころみ}合^あた。

イヤサ何をおどろく。いつ迄親が手を守ふと思ふ馬鹿者。何かはない彼レ等が詮義の落着次第。身が分_{ハル}別_{ハル}しておいたと。きめおふちやうに詮方_{せんかた}も否_{いな}といはれぬ親の氣質_{きしつ}。是非_{ぜいひ}も媚_{なまめ}く振袖_{ふりそで}の詰_{つめ}ひらきせば我_ワ縁_{えん}の。定まるも憂難_{うちなんに}題_{だい}と。案_{あん}じながらも座になをる。

ヲ、出_でかしたく。身は一_一ト間に休足_{きうそく}せんと心をへ残_{のこ}し入跡_{いりあと}に。女風情_{おんなふうせい}の。詮義役_{せんぎやく}。庭_{には}の二人も顔見合せ。少_ちし力_{ちから}を得なからも底氣味_{ぞんきみ}悪_{わる}く扣_{ひか}へ居る。姫_{ひめ}は心を落_おし付_け。ナフ二人の(十五ウ)衆_{しゆ}。聞_ききやる通りの訳_{わけ}なれば辞退_{じたい}もならぬ父の御意_{みい}。サアどれからどれへ行_いく者とありやうにいふたがよい。そしてマア不遠慮_{ふえんりよ}な。着_きやつた笠もぬぎやいのと物_{もの}やはらかに問_{とひ}かけられ。ハ、ハツト一_一チ度_{ちど}に取_とル笠_{かさ}の。下_{した}はこがる、恋人の義平様_{ぎへいさま}にてましますかと。思_{おも}ひがけなき驚_{おどろ}きに。俱_{とも}に驚_{おどろ}く二人がそぶり打守_{うちまもり}りく。ほんにおまへは義平様_{ぎへいさま}。やつぱりおまめで居給_{ゐたまへ}ふかと。寄_よんとすればア、申_{まう}しく。微塵_{みじん}も左様_{さやう}な者でなし。義平とやら公平とやらは大兵_{だいへい}。見た事はござりませぬと。まじめになれば声_{こゑ}をひそめ。何_{なん}しはお隠_{かく}しなされてもよう見覺_{みかく}へてゐる其訳_{そのわけ}は。過_かキし都_{みやこ}の驕_{おご}の時_{とき}。馬上_{ばしやう}でお通りなされしを。アノ亭_{てい}から見_み(十六オ)そめしより。人にしらすぬ物思_{ものおも}ひ。お姿_{すがた}を絵_えにうつし明_{あき}くれ祈_{いの}しかひ有_あつて。ありしにかはらぬ御_ごン粧_まひ。爰_{ここ}ではないかと嬉_{うれ}し泣_{なみ}。抱付_{だき}きたうも役_{やく}からのそ_そろ心_{こゝろ}に見_みへにける。

二人は鞆_{たづ}興_{きよう}さめてなま中_{ちゆう}それとしられては。身_みの大事_{だいじ}ぞと空_{そら}とわけ。私共_{わたくしども}は田舎_{いなか}生_{なま}れ。奉公_{ほうこう}杵_きに参_{まゐ}りし者。馬_{うま}の口_{くち}は取_とつたれど。乗_{のつ}た覺_{おぼ}はさらくなし。お慈悲_{おひじひ}に通_として給_{たま}はれと逃_{はな}げし支度_{しど}する計_{はかり}なり。常世_{とこよ}の前_{まへ}は傍_{そば}により。モウどっちへもやりませぬ。父上_{ちちじやう}に願_{ねが}ふて見て。誠_{まこと}ならぬとの給_{たま}はる。自_{みづか}ら部屋_{べや}にいつ迄_{いつまで}もおかまひ申_{まう}ス覺悟_{かくご}。それはいやかへ。そんな

らどふでもいいたいじやな。サアそれ程にいにたくば。わしも(十六ウ)一ッしよに連^つれていて。殺^{ころ}しなりとどふなりとしたいやうにと計^{はか}りにて。思^{おも}ひ詰^{つめ}たる真^ま実^{じつ}のほに頭^{あたま}はれし花^{はな}すゝき。落^{おち}人の身^みの心置^こキ何^{なん}といらへも春^{はる}の日のあたりまばゆく見^みへにけり。

ム、わしに計^{はか}物^{ぶつ}いはせどふでもいやでござんすな。折^せ角^{かく}思^{おも}ひ思^{おも}ふても嫌^{きら}はれて何^{なん}面^{めん}目^{ぼく}。未^み来^{らい}で待^{まち}ッて居^ゐると刀^やに組^{くみ}れば。コハ逸^{いつ}怯^{きやう}。イヤく殺^{ころ}してくださんせ。日^{いつ}外^げお討^うれなされたと聞^きた時^{とき}は自^{みづか}も。俱^{とも}に死^しんと思^{おも}ひしにながらへて居^ゐたればこそ。けふ優^う曇^{どん}花^げの御^お対^{たい}面^{めん}。たゞ一^{ひと}言^{こと}のいなせさへ難^{づれ}面^{めん}の君^{きみ}やと組^{くみ}り付^けキ。声^{こゑ}も忍^{しの}びのしめり泣^な。涙^{なみだ}は落^{おち}て草^{くさ}摺^{すり}に。露^{つゆ}置^き添^そる風^{ふう}情^{じやう}なり。

義^ぎ平^{へい}公^{こう}は悠^{ゆう}々と下^{くだ}モ(十七オ)部^ぶの姿^{すがた}其^{その}儘^{まま}におめる。方^{あた}なく座^ざを改^{あらた}め。か^かく迄^{まで}我^{われ}に情^{じやう}の上^{うへ}疑^{うたが}ふべくはあらね共^{ども}。名^なをあかされぬ子^こ細^{しさい}あり。此^{この}度^{たび}味^{あじ}方^{かた}の敗^は北^{ぼく}に我^{われ}も討^う死^しせん物^{もの}と。既^{すで}に覚^{かく}悟^ごを極^{きはめ}し所^{ところ}。是^{こゝ}成^{なり}ルは八^は丁^{てい}礫^{れき}の紀^き平^{へい}治^ちとて源^{げん}家^か相^{さう}伝^{でん}の弓^{きう}取^{とり}。則^{すなは}ち彼^かが弟^{てい}志^し内^{ない}の六^む郎^{らう}。前^{まへ}髪^{かみ}立^{たち}を幸^{さい}に我^{われ}にかはらせ。悪^{あく}源^{げん}太^{たい}義^ぎ平^{へい}こそ。難^{なん}波^はノ次^じ郎^{らう}が討^うたんなれと。世^よ上^{じやう}に隠^{かく}れなき上^{うへ}はいよく慎^{つつし}身^みを忍^{しの}び。東^{とう}国^{こく}へ落^{おち}のびて重^{かさ}ねて本^{ほん}意^いを達^{たつ}する存^{ぞん}念^{ねん}。世^よを憚^はる我^{われ}々^々故^こすげなく見^みせしは智^ち略^{りやく}の一^{ひと}つ。世^よになし者の義^ぎ平^{へい}に命^{いのち}を捨^すての心^{こゝろ}ざし。何^{なん}として忘^{わす}れ置^おべきぞと。仰^{おほ}に紀^き平^{へい}治^ち詞^しをそへ。行^{ぎやう}先^{せん}キ々は敵^{てき}の中^{なかつ}爰^{こゝ}は一^{ひと}ト先^{せん}ツ引^ひわかれ。時^{とき}(十七ウ)節^{せつ}を待^{まち}ッこそ実^{まこと}の心^{こゝろ}中^{ちゆう}。今^{いま}暫^{しば}くの辛^{しん}抱^{ぼう}と宥^{なだめ}すかする折^せこそあれ。難^{なん}波^は次^じ郎^{らう}杉^{さき}田^{でん}を引^ひ連^れッつと出^で。ヤア義^ぎ平^{へい}主^{しゆう}従^{じゆう}見^み付^けた。きやつばらをひつく、り常^{じやう}世^せ諸^{しよ}共^{ども}引^ひ立^{たち}テよと。詞^しの下^{した}より杉^{さき}田^{でん}ノ藤^{ふじ}次^じ繩^{じゆう}をか、れとひしめいたり。

ヤア／＼兩人過有リなと。声をかけて主ジの盛久。小庭の方より走り出杉田を突退押シかこひ。イヤサこれ経遠殿。悪源太義平は。日外二条川原において。御自分が首を討チ院の御所の御覽に入レ。清盛公の御褒美に預られたではござらぬか。成ル程／＼。夫レに又此雑兵を悪源太と叫べやれば。ム、ム、ム。先キ達ツて指上たは鷹首にて。清盛公を始め院の御所迄。扱は御辺（十八才）が欺しな。ナアそれは。それはとはどこへ／＼。主君を掠る不忠の侍イ盛久が縄ぶつて。六波羅の御前シへ引ク腕を廻せと詰かくれば。ア、誤った／＼。きやつを義平といふたは成ル程拙者が不調法。正真正銘交なし雑兵に極つた。ム、しかと夫レに違ひはないか。ハテ此難シ波目利じや物。毛頭相違は少共ない。ム左様ならば言分シないと。いふに経遠しかな顔。常世の姫は嬉しさに胸なでおろす計なり。

何思ひけん盛久はずつと寄て義平と。娘を左右に引とらへ木戸より外へ投出す。コハ何事と難波次郎。杉田も俱に騒共見向キもやらず跡びんしやり。雑兵めらが詮義。中々女童が手くさいにて。関所では（十八才）落着せまい。古郷は美濃の大垣とやら。彼レが住家へ伴ひ行。とつくりと見届い。今一人は半時の間此所に留め置キ。跡から帰す早行ケと。思ひがけなき父が情。ム、スリヤあの人にわたしを付けて。ヲ国所の吟味にやるのさ。若分明にしれずんば二年シ三年シ。乃至五年シ十年シ友白髪に成ル迄も戻るには及ばぬ。併詮義相済迄は清盛公への聞へも有ル。何国に居ても音信不通。ナ。そふ心得てくれおれと立派にいへど目は涙。忝い共嬉しい共心詞の御礼は。いはねどしるき親の慈悲。義平公も紀平治も。智仁勇備の情をかんじ互に。詞も口ごもる。

難シ波は以前シの誤りに手ざしならねば杉田ノ藤次。どふやら胡乱な此場の（十九才）捌。今一チ応吟味すると。立寄ル首

筋紀平治が。片手に搦で引戻し。いかれぬ下郎の出しやばり立テと突飛し。早く盛久も。胸すれば難波ノ次郎イヤサコレ舅殿。貰ふて置いた常世姫付てやるとは心得ず。おれへの返事はどふせらるゝと。いはせも立すされば。最前も申すごとく。娘が才智を見よふ為。落人共が詮義にやるが御自分の目にかゝらぬか。帰り次第相談致さふや。またそこを動かぬか。何じや旅の用意に笠がほしい。幸い爰にと脱置し。二つの陣笠拾ひ上ケ。生れてよりけふが日迄一ツ寸外へ出おらぬやつ。道中すがら不便をかけ。突放さぬ様に。頼ムぞと。

恩愛親子の別れの雨。笠を投ケやりしほくと。涙隠して入ルかげを。伏拝み(十九ウ)。戴く笠の内に迄籠る情のト包。袖のかほりや二人連れそこはかとなく出て行。跡見送つて紀平治がイデ。御供と身繕ふ。難波は何がな腹いせにせめてきやつめを引くゝり。落武者共が白状させよ。畏つたと杉田が裁配者共来れと下知すれば。

伝手に得物の長道具ふり廻し。遁さぬやらぬと取りまいたり。紀平治すくく小跳りし。相手のほしい胴中へ打揃ふて御太義千万。命の長柄に運のつくぼうやつばらと。百術千慮の手をくだき右往左往に三重へなぎ立れば。

さしもの多勢たまり兼。主従しどろに打なされ残りはばつと逃失けり。言がひなしと我武者の藤治。引返し切かく(二十オ)れば。しづんで後へもんどりうたせ。すぐに腰骨ひしき付ケ。性こりもなき人非人。不足なれ共難波がかほり。時計のかほりも己が天窓。七つの数にくはつちぐはち。一つ二つは杉田の藤次次手に命を暮し六つと。水もたまらず首打落し。相手なければ是迄と夕附鳥のとりに。我も主君の御跡を追分過きて大津の町。八丁礫が名も高き誉も。爰に走井の源氏に仕ふ身は。仁有り義有信有。虎口の難に相坂の。関を通る、武勇の徳。南海西海東海道味方を。

駢立^{かり}。駢集^{あつ}め。頓^やて敵^かをせめ鼓^{ハル}。汚名^ウを雪^{おめい}ぐ晴軍家^{す、はれ}の向旗打^{ヒロイ}磨^{はた}。再^{ふた}び御代^{みよ}に近江路^ウと悦^いび。勇出^{いさ}て行^い（二十ウ）

第二

八重^{やや}一^{ハル}ト重^{ハル}。都^{ハル}の花^{ハル}は。恋衣^中。きつ、馴初^{なれ}逢初^{あひ}メて通^ウひ廓^{くわ}の道筋^{ハル}は。粹^{すい}も不粹^ふも一^なト啜^{はて}柳^{ウキン}の糸^{いと}に。ひかれくる朱雀^{しゆ}の。町^{ハル}ぞ賑^{にぎ}はしき。

目馴^{めなれ}ぬ事^{コト}で人をよせ是^ウはと人に手^{ハル}を打^{ハル}タす。大門^ウシ口の一^しト趣向^{しゆ}柳^{りやう}のかげに立^たテたりし。一^中枚^{まい}札^{ふだ}の高札^{こうさう}は似合^にぬ所^{ところ}の禁制^{きんぎ}札^{ハル}。花折^{ハル}ラするが商売^{しょうばい}を折^{ハル}ルなど書^{ハル}キしかや見^みよと。立寄^ウルぞめきは遠慮^{えんりよ}なく。ハア、書^{ハル}いたは。ムウ何^{ナニ}シじや。一^一チ文字^{もじ}やの芙蓉^{ふよう}といふ大夫^{だふ}。客^{きやく}をふり勤^{つとめ}をせぬ故^{ゆゑ}。女郎^{ぢやう}仲^なカ間^まへ見^みせしめに。札^{ハル}一枚^{まい}を五十宛^{ごじふ}の富^{とみ}にして。当^{あた}りし方^{かた}々^々へ遣^やはす

（二十一オ）者^{もの}なり。ハア、出来^きた。神武^{じんむ}以来^{いらい}ない図^ずな高札^{こうさ}。請^{まを}出すと。五百両^{ごひやくりやう}の七百両^{しちひやくりやう}のといふ大夫^{だふ}を。錢^{せん}五十^{ごじふ}で手^てに入^いルはたゞ取^とルより安^{やす}い物^{もの}。した^{した}がきやつ内証^{ないしやう}は小野^{おの}々^々小町^{こまち}か蛤^{はまぐり}門^{かど}。あかずでは有^あまいかい。さればなア。若^{もし}それなれば錢^{せん}費^ひし。傾城^{けいせい}と珊瑚珠^{さんごじゆ}は。何^{なん}シは産^{うぶ}が結構^{けつこう}でも。穴^{あな}がなけりや用^{もち}に立^たタぬ。ヨ、それ〱と仇口^{あだ}々^々笑^{わら}ひてこそは行^い過^へる。

鴈^{かり}が飛^とば石龜^{いしがめ}もしだんだ仲^なカ間^まの薦^{こも}かふり。跡^{あと}に残^{のこ}りて大欠^{おほ}び。ヤイ夜明^{よあけ}ケよ。女郎^{ぢやう}を富^{とみ}にすると高札^{こうさ}が立^たたれば。兎角^{とかく}欲^{よく}と色の世界^{せかい}。大抵^{たいでい}や大方^{だうほう}の人^{ひと}ではないが。ちぎ文^{ぶん}もくれぬぞよ。ヨくれぬ〱。こちとは新^{あたら}まいの乱^{みだ}れなればかこひやうが悪^{わる}ル（二十一ウ）いかいなイヤそふもいはれぬてや。そこに居^ゐるやくざめも二三^{さん}日の新^{あたら}まいそふな。見^み〱ごと当^{あた}りがよいやらして。きのふもどて丁半^{てうはん}十^{とみ}で富^{とみ}の札^はを入^いれおつた。ヤイ若^{もし}あの大^{だい}夫^ふが当^{あた}つたら我^{われ}はマアどふするぞい。エまだなやつらじやなア。此^こ身^みに成^なつたりや腹^{はら}計^{はかり}りか。どこやらもひだるい故^{ゆゑ}。折^お々^々の虫^{むし}養^{やしな}ひ。其^{その}内^{うち}に方^{かた}々^々へ賭^か六^{ろく}のたまにするはい。めんつ

を売った五十の銭。当テがなふて入ふかい。追ッ付ケ小判といふ物を。大分シ儲る待ッておれと。雲を当テなる高咄し。夜明け日暮し新まいと。付いた異名もあてどなき七八千の札入群集けふが則チ札びらきと。押シ合せり合犬の蚤。嚙当テよかし突当テよと(二十二才)かた唾を。飲でひかへ居る。

おろせ末社も立駭ぎ。轡の親方傾城芙蓉を引連して。富の箱を男に荷はせ柳の本トにどつかとおろさせ。高見へ上つて才兵衛が一問シ計の錐振廻し。抑此富と申スは。堂塔建立の爲にもあらず。欲しん徳用の勝手にも仕らず。女郎一人もて余した。隙やるも惜さの余り。一トつには廊中。氣随働く奉公人への見せしめ。客をふつたる報の罪。車の輪と申せ共。今は錐の先キを廻くと。富に突てお手に入れる。あんがう鴉を見る様に。口明いて計リござらず共。信を取ッて錐の鑢玉。上様に祈念あれ。イテヤ諸人の迷ひを(二十二ウ)はらさん。南無婦命頂礼と。箱の真中くはつたりぐつすり。突当テたる札一枚。サアく今が恵方果報。ひいきへんばみつちやもない大夫殿。主シはどなたじや此札と。錐の先キにつらぬき見すれば。大門口。野ぶせりの非人新まいの八と読も終らず傾城芙蓉。ハツト計に泣倒れ。暫し。消入ごとく也。数多の見ン物口あんごり。五十捨た百捨た。一貫棒に振舞て裸に成つたとつぶやきながら。皆ちりぐぐに立帰る。

才兵衛は芙蓉を引立。何ンほ泣いてもモウ叶はぬ。乞食の女房にして。五器提させるがこつちの腹いせ。八めはいか果報者。どこにおるぞと見廻せば木影より手をすりぐ。 (二十三才) あんまりで恠り致し。臍玉が飛ましたと。薦衿繕ひうづくまる。仕合者め連れて行ケと。芙蓉を取ッて突やれば。ノウ情ない親方様シ。折檻異見の仕やうも有ふいかに憎しみあれば迎。人にしられたわたしが顔。群集の中でむごたらしい薦かぶりの女房とはあんまりじやはいなどうよくと。恨歎けばせ、ら

笑ひ。ソリヤそちが根性から。悪源太へ心申中立テ外カの客を勤め故。呼出しなければ身請ケももとより。又外々の色里へも廊中の沙汰聞イテ。売かへられぬ余り者乞食にはてうど相応。細言いはずとつと、いけ。八めも連れて行おれと。いはれてやつちや忝し。サア女房共おじや(二十三ウ)いのと。歎く芙蓉を肩にかけおのが小屋へと急ぎ行。

才兵衛跡を打眺め。心からと言ながら。思へば不便と見送り。下人を連れて立帰れば。

跡に残りし二人の非人。ナント夜明ケよアレ見たかい。一万シ近うも有ル札に。たつた一チ枚の八めに当たるは。よくの仕合者。酒なとかはしてこまそふこいと打連レ。かしこへ入ル日影。

時にはあはねば我れも又俱に日かけと歩く。はんちや合羽の袖せばく浪人めきし侍の。旅はあてども長暇柳が本を行過る。

跡より付くる以前シの非人。申シ。コレ申シと。呼かけられて旅人は見返り。路錢も不自由な瘦浪人。付クな。

と行をなをしもア、イヤ是申。其願ひではござりませぬと。間近カ(二十四オ)く寄ルをよく見て。ヤア。こなたは兄者人。紀平太殿。コハエ、情ケなき身の果といふもしほる、目に涙。こなたは猶もつゞれの袖。絞ながらに手をもみ膝す

り面目もなき。今の対面。

此ざまに成たればしるべは本トより兄弟にも。隠れ忍ぶ筈なるに。恥を思はず呼かけたは。少ト其元トへ願ひの筋。聞キ入れてくれられうや。全く。合力無心にあらず。先非を悔ての願ひぞと思ひ。入てぞ見へにけり。

イヤ其礼儀は私めが致す事。斯浅間敷御身とは。しらで暮せし残念さよ。併兄の御身にて。弟の紀平治に御願ひとは勿体

なしと。いふに紀平太猶も手をつき。イヤコレ御自分は弟と言ながら。親の苗字(二十四ウ)を請ケ継。我君に仕ゆれば親人も同然。弟とは思はれず。父と存じて一ト通り申シ上る聞イてたべ。我レ若年の昔。不忠不幸の勤有ッて。御シ怒の御勘気蒙る。方々とさまよひ身の竹もなき故。遠州諏訪野原において。天目の弥源次といふ百姓の方へ入聲。名を。門八と改め無念の月日を送る所に。思はずも都の騒動。主君の御シ大事と聞や否や。シヤ我カ運の開ける時とかけ登ても跡の祭り。義平公には早討死。源氏の運は尽たるかと悔どかひのあらばこそ。夫レより人目を忍ぶ為子細有て此非人。御辺親人に成りかはり。勘当赦すと有ならば心の闇も晴ぬべし。願ひとは此(二十五オ)事と。語るを聞イてハア御尤。ヤモ拙者も其心付カぬにはあらね共。勘当したる兄。紀平太。一トつの功を立てぬ内。兄弟とばし思ふなど。御遺言は背がたし。存生の母の手前。旁以ッて私には赦されずと。いふに点きヲ、さも有りなん。イテ紀平太が一トつの功おことに見せんと片かげより。傾城芙蓉を呼出せば。ノウ珍らしや紀平治様。主シの使も聞キたうて逢たかつたと立寄れば。先ッ其兄にも御案体。シテ此所にはどうしてと。問れて芙蓉は。涙にくれ。

義平様に別れてより心は心ならね共。おなかにやどしたや、様を。どふぞ御無事に産落し。其上ではともかうもと。思ふ内に(二十五ウ)もせつなき勤。客をふるの嫌ふのと親方の打打擲杖うけた其あげく。富にせられて思はずも紀平太様のお手に入。憂を凌げど凌がれぬは。義平様に逢たうてやるせがないと縋り付キ声をも。立ッ泣居たり。

紀平太も涙ながら。御懷胎の芙蓉殿の問も人手には置カれず。殊には平家の聞へを恐れ。御シ行来のござる所を隠さん為。斯浅ましき姿と成り。親方才兵衛と馴合。我富札に突当テしは。勘当願ひの詫の種。これ聞入有ッてくれられよと。いふ

より紀平治ハア重疊ちゆうおうく。此上この上の有べきか。父にかはつて御勘当ごかんたう憚りながら某なかが。御赦ごゆるし申せぞと。(二十六才)聞より

ハ、ハ、ハ、ハツト飛すさり低頭。平身なしけるが。何思ひけんずと立。取つて突退氣色を正し。我力勸当を赦されたれば。

又親人に成りかはり。儕きを急きつ度と誠しまて。七生迄ななうぶの勘當かんだうぞと。いわれて恟おこりトハ何故ゆゑ。何誤あやまりといわせも立たずヤ誤あやまりな

いとほうろたへ者。詞義平公討死の戦場迄。せんぢやう御供したる儕でないか。おめくと生キながらへ。敵の首はなぜ取ラぬ。ガよ

し夫レも叶はずば。追イ腹でもかつさばき冥途迄もお供はせず。生面さげて徘徊する。犬におとつた知行盗人勘当したが

誤りかと。地ルいやおうならぬウづめ理詰の詞。聞クよりずつと膝ひざり摺寄。せハア先ツ其お心で猶も安堵。あんど実は御主人義平公。まご御存生にぞんじやう

てまし（二十六ウ）ます故。芙蓉殿に此事を御しらせの為参りしと。聞地バルて紀平太色大きに悦詞び。シテ我君は何いづく国にと。いふ地ウ

に芙蓉にも夫レよりはいかゞと案じ暮せしにとふして遁れ給ひしとふしぎ立るも道理なり。や兄貴はいまだ御存有ルまい。

其時の戦ひ事急の手詰に成り。弟志内の六郎多勢が中へわつて入。悪源太義平と名乗手いたく働。終に難波ノ次郎経遠

が手にかゝり。あへなきさいごを遂る内君は遁れ落給ふ。我しも追くる敵をはらひ漸御子供致せしと語れば芙蓉は飛立ッ嬉

しき。紀平太は目をしばたゝき。弟志内六郎は母人の愛子といひ。義平公とは乳兄弟。御恩に命を捨しよな。健氣也へエ、

出かしたと。口には立派。心には不便（二十七才）の者の最期やと。涙に。むせぶ折こそ有^レ

いつの間にかは夜明々と日暮し。二人の非人は窺ひ寄り始終残らず聞届た。しらずや我^しは平家の家臣。鷲塚平内小車源五

隠し目付ケの手始めと飛かゝるをかくぐり。シヤ小ざかしき腕立テと。二人を打付ケ足下にふまへ。サア兄者人。こいつら

を片付けて互いに別れん。ヲ、尤某は芙蓉殿の御ん供して。今の住家に忍ばせ申さん。成ル程。拙者は其以来母人の音信聞カ

ず。一ッ旦立こへ対面遂。夫レより御行衛尋申さん。首途に血祭のがらくためらと二人が一ッ度首拔キ捨。追ッ付ケ平家の一ッ門をまつ此ごとく本ッ望とげん。先ッ夫レ迄はさらば。こな様シまめで。おまへも堅固に。主ッ様無事の便りを待ッおさらば。さらばの暇乞柳の糸の。もつれ合たる兄弟は引。わかれてぞ三重(二十七ウ)

道行梅の陣笠

山^一風風立さはく。世に連て。ちりぐと成ル木のはかな。源^{スエテ}の義平は。待賢門の夜軍より都を。出て相坂の関の戸ざしを盛久が。情にゆるむおのづから。笠もふかくを取りし身の。従^中ふ者も遠近に父の行衛や弟の。在家もしらず落武者と。成り行世にも。近江なる。志内が方へと心ざし。かちぐをへたどり出給ふ。御有様ぞ。わりなけれ。逢もうし。逢ぬもつらき恋すてふ。我レはまだねぬ。常世姫。おくれし道を走井の。水もらさじと契りても。心はとけぬ玉(二十八オ) 櫛笥二人りは行どかたぐに杖よ。草鞋よ引しめてしども嬌くふり袖に鎧の袖をくらべては。都のふじの。日枝風残の雪は。ちらぐと裾に鹿子や。打出の濱。千船百船漕連て。世をうみ渡る浦々見れば。夫は網ひく婦は麻苧の営によるべの。方の磯枕。殿持チ顔に帰る雁。羽打かはし二つ三つ。四つの緒かけて。びはの海包む霞の晴間より。もれくる鐘は三井の寺。古郷は跡に。父上の。情ときりの梓弓引にひかれぬ義平は。芙蓉が事をくよくと。案じ詫ても。それとだに。心にかたき緞帶。さしもにたけき。武士の。恩愛深き湖の。底意を包おはすれば。(二十八ウ) 姫は何シの気も付かず思ひ。初たは去年の春。又も初ッ春立ッ年シの。始め思へば中カぐに。あふてつらさの勝り草比は七種初ッ若菜。薺ぐと。打はやす賤が門田は賑々と。軒場ぐの注連かざり子の日にひかん松本の。里の童が誘ひ連し。あすはお立かぐお名残おしさは

限りなや。せめてわたしがお供で草津の茶屋迄送りましよ。やんれおかまひ有ルなノフ。わかれの涙がでんこそへ。おせ、でないやい。ヤレく涙がでんこそへおせ、ゑ。うたふ声く身にしてみてうかむ涙のもろこ川。ながき旅にはあらね共。心づかひに道（二十九オ）ばかもゆんでに見ゆるひもろきは田畑の宮と聞クからに。我も兄弟主従が再びめぐりあふ事を。守らせ給へと伏拝み。神にさゝぐる飯炊く。粟津が森の松原に梅が。火ともす未開紅するどき鑑梅芽を出す蘆。行を乱せる鳥井村。敵の伏勢ござんなれ。寒紅梅を平家になぞらへ。東風吹ク風は味方の軍兵。彼唐士の白顔帥軍を治めて帰朝の時。梅を折つたる其例今義平が魁して。いざや太刀恨んと躍上つてハッシと打テば。條はかしこに。ちるは非常の花々敷キ。前後の備に隊伍を守り。揃ふ矢橋（二十九ウ）の順風船はる武者歩武者騎馬武者は。驛路の鈴に勇をなし堅田の浦の。遠干渴是ぞ囊沙の謀。行なる雁は孔明が。八陣の図に等きと。古詩を吟じて行ク先きは。瀬田に入日のまばゆくて斜に。覆ふ笠のはも。空は春めく旅衣。着つ、馴たる。恋の道蕨が指にべにさして。鉄漿も祝はん薄化粧。今宵の宿を新枕。二つならべてさゝめ言。あふて語らん嬉しさに先キへ。急げば跡に成り。招けば招く百千鳥我にたぐへて鳴音かと。いと。ゆふぐれの山々は。笑ふがごとく久かたの月の詠の名所ロや。頼みはおもき石山の辺に。こそはへ着にけれ

（三十オ）

ひとかた。ならぬ。物思ひ。よるべ定め憂ことに。近江ノ国石山寺の片辺に。人の目立タぬ一構八丁礫兄弟が母の阿栗。末子志内ノ六郎を引連退し隠居屋敷。子供は都へ軍の供。凱陣を待ち兼て目かいの見へぬ物案じ。琴の秘曲をうさ忘れ。京も心もとけぬらん。

下女^{地色中} 姫^{こしもと}は立つどひ看^{かん}経^{きん}前の御^み明^{あかし}も。光^かり輝^かく内^{うち}仏^{ぶつ}檀^{だん}。焼^や香^{かう}薰^{くゆ}らせ老^{らう}母^ぼの前に手^てをつかへ申^こかみ様^{さま}。此^こ間^{かん}から看^{かん}経^{きん}もなされず。琴^{こと}計^{けい}りをお弾^ひなされてござるのは。お心^{こころ}が若^わ力^{りき}やいでおめ^{おめ}でたう存^{ぞん}ます。ホ、ホ、。皆^{みな}の手^て前^{まへ}も恥^{はづか}かしい。目^めが見へてさへ年^{とし}寄^よりは仏^{ぶつ}いぢりが仕^し事^じなるに。そち達^{たち}が折^つ々^まの爪^{つま}音^{おと}。羨^{うらやま}しさに(三十ウ)やつては見^みれど。若い時^{とき}とは大^{おほ}きに違^{ちが}ひ。手^てがおも^{おも}く^くれていかぬ。イエ。習^{なら}ひ込^{こん}で御^ござります琴^{こと}の音^{おと}色^{いろ}は又^{また}格^{かく}別^{べつ}。憚^{はづか}りながら今^{いま}一^{ひと}曲^{きょく}。お聞^{きこ}カせなされて下^{くだ}されと。くちく願^{ねが}ふ折^せこそあれ。

御^ご客^{きやく}さふとほのめきて。兵^{へい}庫^く頭^{とう}頼^{らい}政^{せい}の執^{しつ}権^{けん}競^{きやう}瀧^{たき}口^{くち}。上^{じやう}下^げモ立^{りつ}派^ぱにいため付^つけ。顔^{かほ}はしかみの上^{まへ}人^{まへ}眉^{まゆ}すてつ^つべいから爪^{つま}先^{さき}迄^{まで}。理^り屈^{くつ}ばつたる洪^{しやう}紙^{かみ}親^{しん}仁^に行^{ぎやう}義^ぎ。正^{ただ}しく入^い来^きれば。跡^{あと}にさがりて。おもはゆけに。秘^ひ蔵^{ざう}娘^{むすめ}の権^{けん}が。顔^{かほ}を隠^{かく}せし綿^{わた}帽^{ぼう}子^し父^ふに伴^{ともな}ふ取^{とり}りなりもかいしよらしげな品^{しん}かたち。おほこに見^みへてかはゆらし。

姫^{こしもと}共^{とも}が取^{とり}り次に阿^あ栗^{くり}は驚^{おどろ}きさぐり出^で。コレハく珍^{めづ}らしや瀧^{たき}口^{くち}様^{さま}。同^{どう}じ源^{げん}家^けの家^け臣^{しん}なれ共^{とも}。(三十一オ) お主^{おぬし}がかはれば家^け来^き迄^{まで}。いっお出^で合^あも申^{まを}さぬに。ふとした縁^{えん}で一^{ひと}家^けの約^{やく}束^{そく}。他^た人^{にん}他^た門^{もん}の何^{なん}ぞのやうに御^ご案^{あん}内^{ない}とは町^{ちやう}噂^{わさ}過^かきた。マアお通^{とお}りとおしらへば。御^ご免^{めん}なれ御^ご老^{らう}母^ぼと。娘^{むすめ}を連^{れん}れて上^{じやう}座^ざに直^{ただ}り。仰^{おほ}のごとく互^{あひ}に面^{おもて}は見^みしらね共^{とも}。聞^{きこ}伝^{でん}たる武^ぶ勇^{ゆう}の家^け筋^{しん}。殊^{こと}に御^ご末^{まつ}子^し志^し内^{ない}ノ六^{ろく}郎^{らう}景^{けい}澄^{じやう}殿^{でん}。悪^{あく}源^{げん}太^た義^ぎ平^{へい}とは乳^ち兄^{けい}弟^{てい}。旁^{かたがは}以^{もつ}瀧^{たき}口^{くち}が智^ちに取^とつて不^ふ足^{そく}なしと。文^{ぶん}通^{つう}を以^{もつ}て申^{まを}かため祝^{しう}言^{げん}の吉^{きち}日^{にち}を。待^{まち}ッ程^{ほど}もなく都^{みやこ}の騒^{さわ}動^{どう}。事^じ延^{えん}引^{いん}に及^{およ}びしが最^も早^{はや}源^{げん}平^{へい}戦^{せん}も治^ちり。左^さ馬^ま頭^{とう}義^ぎ朝^{ちやう}公^{こう}御^ご親^{しん}子^し共^{とも}に敗^は北^{ぼく}なれば。智^ち殿^{でん}も應^{おう}凱^{かい}日^{にち}を。待^{まち}ッ程^{ほど}もなく都^{みやこ}の騒^{さわ}動^{どう}。事^じ延^{えん}引^{いん}に及^{およ}びしが最^も早^{はや}源^{げん}平^{へい}戦^{せん}も治^ちり。左^さ馬^ま頭^{とう}義^ぎ朝^{ちやう}公^{こう}御^ご親^{しん}子^し共^{とも}に敗^は北^{ぼく}なれば。智^ち殿^{でん}も應^{おう}凱^{かい}陣^{じん}を致^{いた}す述^のにける。ヤレく夫^それはお嬉^{うれ}しや。そふ奥^{おく}底^{てい}のないでこそほんぐの真^{しん}味^みなれ。併^{しか}兄^{けい}の紀^き平^{へい}治^ちも六^{ろく}郎^{らう}もまだ凱^{かい}陣^{じん}を致^{いた}

さぬが。弥噲に違ひもなう義朝公の負軍か。成程く鬼神ミと呼ばれし悪源太義平公。二条川原において討死めされ。御首は難シ波次郎経遠が討取ツたりと。聞クより阿栗は大きに仰天。ナニ源太様は討死とや。ハツはつと計に腰もぬけ。暫し涙にくれるが。

軍の勝負は時の運負るが恥でもなき物を。血気にはやる御大将深入しての討死か。エツエ仕なしたりく。といふて今さら返らぬ事悔まじ(三十二オ)歎くまじ。せめてふたりの子供等が無事に戻つてつてくれよかし。早う逢たや恋しやとそゝろに案じる親心。權は傍に寄。私はお前の嫁でござります。遠からの御契約なせ軍にござらぬ内。呼迎へては下さんせぬ。若討死でもなされたら一生殿御のはだへもしらず。後家にするお心か聞へませぬと取り付いて打恨たる気色也。

ヲ、道理く是は母が誤った。其詫は戻り次第第六郎にさせませう。瀧口様も折角お出。祝言の寿を見ずにお帰りなされるも気の毒。一二日は御逗留遊ばせ。其間には六郎も立帰るでござりませう。權そなたも奥へ同道休足仕やと有りければ。イエくかう参るから(三十二ウ)は大事のか、様。お目の不自由な御介抱わたしが致さにや成りませぬ。爺様計り奥へいて。少お休と氣を付ければ。ヲ、嫁する時は其父母に仕るが肝要。けふより我レは他人も同然。御老母へ宮仕へ片時もお傍を離るゝな。ヤイ家来共。其挾箱は手持。ハツト下モ部がかき上ければ瀧口小脇にしつかと挾。智引出は六郎に對面したる上の事。老足の労も有レは暫く一ト間にくつろぐへし。後刻くと必が案内に連て入にけり。

程もあらせず表テの方紀平次様の御入りと。取り々しらせる下モ部に引連。宿所へも立帰らず旅装束を其儘に。母の御顔見まはしく直に是迄紀平次が。唯今凱陣致せしと。いふ声聞いて母は悦。(三十三オ)ヤレく子供より戻りしな。何んと

して遅かりし六郎も一ツ所ならん。是に居やるは嫁の^{あさがほ}。たつた今瀧口様が連レ立ッてお出なされ。待兼た^{どう}胸ぶくら。早速女夫の^{さづき}盃と言たいが先ッ何かは指置^{さし}て。氣にかゝるは義平様の御^{さへ}最期。先キ達ッて聞つるが人の^{うはさ}噂に違ひはないか。どふじやと尋^{たず}られ弟六郎景澄は。御^ウ命にかはりしと申上人も^あ。御^{さへ}傍を離^{はな}れぬ上母の歎^{なげ}きを思ひやり。ハツト計に返^{へん}答は涙にくれて居^中たりける。

^{地色ハル}。僅は夫の顔早う逢^{あひ}たさなつかしさ。申^詞。紀平次様とやら。私はお前の弟嫁でござんす。六郎様はなぜにお歸りなされぬへ。ほんに又主^しもぬし。いかに顔を見しらぬ^{いひなづけ}言号の女房が。来^{地ハル}て居よる共思しめさずどこに何してご(三十三ウ)ざるや。お氣の付^ウかぬ事では有^ルと。母にしらせる^ア壁訴訟。ヤア六郎は戻^{もど}らぬとや同道はせざりしか。道にばしおくれたか心^{もと}元なや氣づかひと。あせれば猶々^{とうわ}当話も出ず。イヤ追ッ付^色ケ只今と紛^{まぎ}らす所へ。悪源太義平公常世の前を誘^{いざな}ひて。来^{ハル}かゝり給ふを紀平次が見^ウるよりちやくと走^{はしり}寄。姫を小^こかけに忍はせ置^みキ御^み耳際^{みみぎは}に口^{くち}を寄。さゝやく内に^{あさがほ}。僅は。聞^{ハル}キしに違はぬ年^し恰^{かつ}好振分^{かつ}髪^{かみ}の義平公。我^ウ夫なりと思ひ詰^{つめ}申^詞。母様六郎様が今お歸りなされたと。聞^{地ハル}に驚^{おどろ}く主^{しゅ}従^{じゆ}が兎^とやせん角^{かく}やと氣もいらち。うろくとしておはします。

^詞。ドレ戻^{もど}り(三十四オ)つたら爰へこよ。いひたい事聞^{きこ}たい事。胸の内には百^{ひやく}千^{せん}万^{まん}。ナアく早うとせき立^たれば是非^{ぜいひ}に及ばず御^ウ大將。老^{ろう}母^ぼが心をなだめる為^{ため}志^し内^{うち}ノ六郎景澄と。紀平次が取^と次^じキにて小^こ腰^{こし}かゝめて出^で給^{たま}ふを。僅は。一ツ心不^ふ乱^{らん}夫と心得御^ウ顔^{かほ}に。眺^{なが}入^めたる恋の坂登^{のぼり}詰^{つめ}たる嬉^{うれ}しさも。後^{のち}の歎^{なげ}きの種^ねならん。ドレ近^{ちか}うよれ用^{もち}有^あと探^{たず}り寄^よて義平^{ハル}の。御^も髻^{むす}を手にからまき老の力も腕^{うで}限^{かぎ}り。ゾット引^ひよせ引^ひ居^する。コハ何^{なん}ゆへと兩人^{ふたり}が。手に絶^{すが}れば突^つ退^{たい}く身^みを震^{ふる}はし。涙も交^{まじ}るしはがれ

声。ヤイ爰な人でなし。其未練な根性で中々母がいふ事を。尤とは(三十四ウ)思ふまい去ながら。少シでも魂が有ルならば耳をさらへてよう聞おれ。義平公には此母が産家の内よりお乳を上ケまし。御育申せし故外ならず思召シ。勿体なや乳兄弟とて志内といふ苗字を下され。各別にお取り立歴々の御家臣並。此度の着到にも。五番と跡へさがらぬは。皆源太様の御恩にあらずや。其君が討死なされ口惜や難波づれに。御首を取られ給ふ。御無念さと思ひやらず。敵さへ討ツ事がすごくと逃歸り。どの面さげて此母に対面をせうとは思ふ。業さらし恥しらず。切刻でもあきたらぬ大腰ぬけ。儕がまめで戻らふより死んで死骸(三十五オ)が戻つたら。老の身の悦びは。何程で有ルべきぞ。

憎うてならぬと引しやなぐり。打つ擲つ突飛し。怒の涙はてしなき心の。内ぞいたはしき。紀平次は最前より主君ンとしらで老母が慮外。勿体なや恐ろしやと立寄ルを義平公。御目くはせにて押シとゞめ。忠義一途の一チ言に深く感ぜし御有様。母の教訓權が身にもこたゆる悲しみの。指うつ。むいて居たりしが。お袋様のお腹立さら／＼御無理はなけれ共。死スる計りが忠義でも孝行でもござんすまい。命を捨てに恥辱もすゝぎ御機嫌の直る様に。分別して下さんせと。我夫ならぬ夫ぞとはしら(三十五ウ)で案じる気あつかひ。縋り歎けば紀平次も。義平公も氣の毒の顔をそむけておはします。

老母は猶もはりつよく。ア、嫁御寮のあまぢや、な氣遣ひがり。あいつが兄に紀平太とてモひとり大きなあほうが有ル。過行れた旦那殿がとうに勘当して置かれた。そいつにはまだどこやらに侍いくさい所も有レド。兎角あいつは臆病者。恥をかいても不忠に成ツても。死るやうな立派な性根さげるやつじやござらぬ。親兄弟の面よごしとつと、出て行ケ子でないぞ。エ、おまへあなたを追出し。わたしはどうして下さんす。ハテわしが大事の嫁。親や女房に機嫌よう添たい(三十六

オ)といふ心が付ツキ。お主の御恩を報ほうずる程の手柄てがらさへ見るならば。誰たれか託言わひことより挨拶あいさつより。是に越こしたる孝行かうくもござるまい。夫婦夫婦いもせの盃さかづきはそれ迄母が預あづかつて。嫁ウ姑よめやあいやけ同とし士。膝直ひざをしの盃さかづきせう。した調が親子兄弟あひなでも武士あひなは恥有ル物。かうした訳わけを瀧口様へ隠して互いに打うちにつこり。女子地中共に琴弾ことひかせ酒事さけこと始はじまへと。うかぬ娘をむりやりに。勝ウッ手覚おぼし奥の間へ引連フシれてこそ入いにけれ。

常世とこよの前も。小ちかげにて。老母ウの腹立ハルチハル権ハルが。詮せんなき歎なげきに走はり出。おふたりの心根こころがわしやいというてさつきにから。泣てばかり居たはいな。とても一ひと度は知しれる事いつそ(三十六ウ)様子を打明うちけて。とくどウうをさせますやうになされたらよ色かるそへ。イヤ詞くそれは遅おそからず。権が父瀧口。院の御所へ御味方みかた致したる頼政かみが家臣かしんなれば。君御存命きみごんにまします事。白地あからまには申まがたし。何事ウも此紀平次こへいに任せ置まき先ツ々ト間に御入いりと。申ハル上ハルれば義平公ぎへいこう。良御涙やうウに。くれさせ給ハルひ。孟母もうぼは三度隣となりをかへ。子に教おしをなすいつくしみ。王陵わうりやうが母の義心ぎしん迄思おもひ出して日の本にっぽんの。烈婦れつふといへるは汝等が母の阿栗あぐり。かゝる血筋ちぢんを請うけたる六郎。源太が命にかはりしとは露あいさ、かもしらされば。不忠者ふしゅうとて憤いきどるは理ことりなり去ながら。死しだと聞きかば恩愛おんあいに(三十七オ)ひかれて迷まよふは親のならひ。権といひ母といひ撫さや歎なげかな不便ふびんやと。古今ここん名譽めいよの勇将ゆうしやうと呼れ給たまひし義平の。むせび入たる御風情おふうじやう有りがたし共忝かたじけなし共。冥加めうか涙に紀平次は。伏拝ふしおがみく暫しばし。泣入なみり計りなり。漸や御中目めをはらはせ給たまひ。不覚ふかくの歎なげきに某たれが存ぞん命めいイを人しらば。命を捨て六郎が志こころざしも立たがたし。兎ともかうも思案しあんを極め姫が身の上みづかみに頼たのみ。こなたへこよと宣のたまひて。ふたりに誘いざなひしづくと障子しやうじのへ内へ入給たまふ。恋ウといふ。其曲物そのまがものの。なかりせば。人の誠まことはしれまじと。書つたき伝つたへたる権は。日かげ待まちッ間の契けいり共。しほくとして忍しのび

出。お袋（三十七ウ）様の御ハル情忝中い事ながら。流浪ウラウなさるゝ六郎様を何ハルと見捨て置かれうぞ。わたしも一ッしよに出て

行覚悟（三十七ウ）。跡でしかつて給はるなとなくく一ト間に。指アソかゝれば。

しめやかなる女ウの聲。コハ心得ずと障シヤウジ子の内。覗のぞくあなたに義平公。常世トコヨの前と指中回ひ。耳ミミをすませば泣色声にて。譬何国たとへづく

の浦迄も離はなるゝ事はわしいやいやく。連れていて下さんせと。縫地ハルり付ていく体見るより惻び色り。ヤアあの女おなこは。いつの間にどこ

から来た。あたいやらしいあつかはなと。氣もせき登のぼる胸ウの積しよく。押おして内へもはいられず。奥へも行れずうろくくと。前上

後涙ウにくれるが。エ、聞ハルへませ（三十八オ）ぬ六郎様。言号いひなづけの事なれば御凱陣かいじんなさるゝと。嫁入よめいりするはしれた事。いか

に殿御ウのかうけじやとて。是見ウよがしにどうよくな。不覚ウを取ウつて母御様の。お呵しかりを請ウケ給色ふも大方其女中ゆへでござんし

やう。心上づよやと打伏中ツシツて。泣沈なみみたる折こそあれ。

奥地色ウの座敷は賑にぎはしく。音ハルもさへ渡る玉琴ことに。哥ウのしやうがも身にしみて。あさましや。いつの世ハルには。わすれん。アノ

哥は雪のあした。葵あひの上の怨霊おんれい。御息所みやすを悩なやせし恐おそろしき一ト手にて。葵あひの曲共名付きよくケたり。いか様ハルわしもあそこへ踏ふん

込こみ。恨うらみのたけをいふてのけふか。イヤくそれでは奥へ聞へ。猶も（三十八ウ）夫の為ならずと。心地ハル一トつに納おさむれば。又

うたひ出す浮世哥（二上リ哥中ハルウ）。いつそ此身きへは。消中なばきへね。生ハルウきて添共そふ。面白おもろからぬ。ヲ、ほんに思へばそふじやなア。昔唐土むかしもちうこしに

ひとりのおのこ。他国たこくへ軍に出たる跡。其母妻つまを迎むかへ置ウク。程過よめきて嫁よめの女房野辺のべに出て菜摘なづみをせしに。旅人の返り合せ無

理無体りむたいにたはむれしを。振切なつて立帰たる。しばらくして彼旅人かの。此家このに来るを母に聞きケば。いひ号なづけの我夫わがなり。永々古郷ながくこきやう

の母女房待まち焦こるとはしらずして。我を外の女と思おもひ色いろをしかけし悪性者あくしやうもの。聞きコへぬ男おとこと自害じがいして夫を諫いさめし例たともあり。

(三十九才) 自^{みづから}が今の身も是^{こゝ}にはかりし事はなし。死て夫^{つま}トの諫^{いさめ}にと。覚悟極めし懷^{ふところ}刀。抜^はクより早く我^{われ}と我^{われ}カ。咽^{のど}にがはと突立^{つき}テ。ハツト玉^{たま}ざる一ト声に。一ト間の内より主^{しゅ}從^{じゆ}三人。としや遅^{おそ}しとかけ出れば。母も奥より転^まび出。コハ何ゆへの自害^{じがい}ぞと。尋^うられても此^こ場のしぎ。いは一^{いち}チ倍^{ばい}憎^{にく}しみの。か、らん物と今^{いま}端^は迄^ち取違^{ちが}たる夫^{つま}思^{おも}ひ。コレハく^とと計^{はか}りて泣^なより外^{ぐわい}は苦^{くる}しみ。血^ち汐^{しほ}に争^{あらそ}ふ涙^{なみだ}なり。

父^{ちち}の競^き瀧^{たき}口^{くち}は襖^{ふすま}の内より歩^{あゆ}出^で。今^{いま}相^あ果^はる娘^{むすめ}なれば何^{なん}程^{ほど}の一^{いち}チ大事^{だいじ}も。他^た言^{ごん}すべき余^よ命^{めい}はなし。子^こ細^{さい}を打^う明^{めい}ケ湛^{たん}納^{なう}させ。未^み来^{らい}も迷^{まよ}はず一^{いつ}ト筋^{すぢ}に。(三十九ウ) 成^{じやう}仏^{ぶつ}させて下^{くだ}されと。いふに人々^{おどろ}驚^{おどろ}く内。老^{ちゆう}母^ぼは一^{いつ}ト間の仏^{ぶつ}壇^{だん}より。一^{いつ}トつの位^ゐ牌^{はい}を採^さ出し。しほれか、りし權^{けん}が。前^{まへ}にすへ置^き涙^{なみだ}をながし。コレ嫁^{よめ}御^ご。そなたの夫^{つま}ト志^し内^{ない}ノ六^{ろく}郎^{らう}影^{かげ}澄^{すみ}は爰^{こゝ}に居^ゐる。それにお渡^わりなさる、は惠^ゑ源^{げん}太^{たい}義^ぎ平^{へい}様。殿^{てん}御^ごが違^{ちが}ふたこなたへと。思^{おも}ひも奇^きぬ一^{いつ}言^{ごん}に。手^て負^おうは恠^{おどろ}り紀^き平^{へい}次^じも。仰^{かう}天^{てん}ながらコレ母^ぼ人^{にん}。それは何^{なん}を御^ご意^いなさる、。イヤもふどふも隠^{かく}して居^ゐられぬ。スリや我^{われ}君^{きみ}の御^ご安^{あん}体^{たい}様^{やう}子^こ具^ぐに御^ご存^{ぞん}ジか。ヲツヲ道^{みち}法^{のり}は纔^{わづか}四^し里^り半^{はん}。大切^{たいせつ}な養^{やう}君^{きみ}。殊^{こと}に六^{ろく}郎^{らう}景^{けい}澄^{すみ}が。初^{はつ}陣^{じん}の御^ご供^くなれば。風^{かぜ}の吹^ふにも心^{こゝろ}を付^つケ待^{たい}賢^{けん}門^{もん}の軍^{ぐん}の次^じ(四十才) 第^{だい}。景^{けい}澄^{すみ}が御^ごン命^{めい}にかはりし迄^{まで}。事^{こと}こまかに聞^{きこ}計^{けい}りか。何^{なん}ンば目^めかいが見^みへぬとて。七^{しち}夜^やの内より抱^だか、へ。育^{そだ}上^{たて}參^{まゐ}らせし若^わ君^{きみ}と。我^{われ}カ血^ちを分^わけし六^{ろく}郎^{らう}を。取^ち違^へてよい物^{もの}か。畳^{たたみ}ざはりの御^ごン足^{そく}音^{おん}。お髪^{かみ}へちよつとさはつても。義^ぎ平^{へい}公^{こう}とはしつたれど。奥^{おく}には競^き瀧^{たき}口^{くち}殿^{てん}。傍^{そば}には嫁^{よめ}の權^{けん}が。夫^{つま}トと思^{おも}ひ詰^つたるこそ。御^ごン名^なを包^つに能^よ方^{まて}便^{てん}と。我^{われ}レも一^{いつ}ぱい喰^くた体^{たい}。勿^な体^{たい}なや恐^{おそ}ろしや。お主^う様^{やう}を打^う手^て擲^{ちやく}。心^{こゝろ}の内では天神^{てんしん}地^ち祇^ぎ。日^{にっ}本^{ぽん}ノ国^{こく}の神^{かみ}仏^{ぶつ}に。お託^{たく}び申^{まを}て。居^ゐたりしそや。それになまだ笑^{せう}止^しなは今^{いま}此^こ子^し細^{さい}を打^う明^{めい}ケると。心^{こゝろ}のかたい瀧^{たき}口^{くち}様。顔^うさへしらぬ男^{おとこ}の為^{ため}。若^わいあの子^こをいかす後^ご家^け。尼^{あま}に(四

十ウ) てもさつしやるは必定^{ひつちやう}。六郎^詞にあいそをつかさせ。里へ歸りて外^外カ々へ緑付^緑キをさせう物と。情^{地ハル}がかへつて怨^{あた}と成^上り。死^{ていじよ}て貞女^{ていじよ}を立^上る氣に。何^ウと。包^中んで居^中られうと。誠^中をあかす老母^老の歎^{なげき}。父^{ハル}も涙^涙のまぶたを^色はらひ。娘^詞あれをよう聞^聞たか。そちが夫^夫ト景澄^{景澄}は。天竺^{てんしん}震旦^{しんたん}我^我カ朝^朝にも。比類^{ひるい}なき忠臣^{忠臣}也。かゝる健氣^{けんけい}の夫^夫トに添^{そふ}は。女^女たる身^身の仕合^{仕合}ぞや。さは去^{地色中}ながら今^今生^{こんじやう}にて。一^ウチ日^日片^片時^しの交^{まじは}りなく。位^上牌^{あは}に成^成つた智^智殿^殿と西^{さい}方^{ほう}淨^{じやう}土^どへ敷^{やぶ}入^入する。はかない縁^縁を人^{ハル}々にも。不^ウ便^{びん}がつて下^下されと。堪^{こたへ}兼^兼たる溜^{ため}涙^{なみだ}漲^みり落^落る瀧^瀧口^口が袖^{フン}は洩^み瀨^せとかはりける。

地色中 義平^{義平}(四十一オ) 夫^夫婦^婦紀平^{紀平}次^次も子^子を先^先キ立^立つる親^親々の。歎^{なげき}キを察^{さつ}し諸^ウ共^共に。むせび入^中たる御^御涙^涙今^今端^端の樅^樅目^目を^{地色中}ひらき。傍^{そば}なる位^あ牌^牌を膝^{ハル}に乘^{のせ}。ア、有^ウがたや嬉^{うれ}しやな。臆^{おそ}病^{びやう}未^み練^{れん}の夫^夫トを諫^{いさめ}。悲^ウしい死^死をするのかと。何^何ンほう胸^{こゝろ}を痛^{いた}しに。出^詞かさしやんした六郎^{六郎}様。と、様^様やお袋^お様^様シが。大^大分^{ぶん}嘗^{ほめ}てござるぞへ。こ^{地ハル}んな殿^殿御^御を持^もつわしは。人^人に勝^{すぐ}れた果^く報^{ほう}者^者。逆^{とて}の事^事に女^女房^房か^キと此^ウ世^世でたつた一^一言^{こと}の。お詞^詞をかはされぬか。テモ物^物いはぬお方^方じやと。位^ウ牌^牌を身^身に添^{そへ}抱^{いだ}しめ。絶^{たへ}ル息^{いき}の下^下よりも。く^クどき歎^{なげき}けは。道^詞理^りじやく。年^年シ寄^よつてさへ夫^夫トに離^{はな}れ。後^ご家^けに成^成ル身^身は悲^悲しい物^物。水^水の出^出花^花が今^今咲^咲ク花^花。苔^{地ハル}の顔^{かほ}も見^みぬ夫^夫ト。(四十一ウ) 別^別れた上^上に死^死で行^行。よくく因^{あん}果^{くは}な縁^縁を組^{くみ}。あぢきない事^事聞^きク母^母が。心^ウの苦^{くる}しさせつなさはいか計^かりとか思^{おも}ふらん。朝^{あさ}晩^{ばん}の看^{かん}経^{きやう}も仏^{ぶつ}に向^{むか}へばわが子^この事^事。思^{おも}ひ出^でしてたまらぬ故^{ゆゑ}。い^ウけもせぬ琴^{こと}を弾^ひき。紛^{まぎ}らかして居^ゐたはいのふと。身^ウをもだへたるさけび泣^な。皆^皆身^身にかゝる涙^{なみだ}の雨^{あめ}しほらぬ。袂^{たもと}はなかりける。

地色ハル 紀平^{紀平}次^次はつと心^心付^{つけ}キ。君^君御^ご在世^{ざい}の御^ご事^じを。深^{ふか}く包^つむは時^し節^{せつ}を待^{まち}チ味^{あじ}方^{ほう}の臍^{はら}を^{はら}かためん為^{ため}。か^かく露^ろ頭^{けん}に及^{およ}ぶ上^上少^{せう}シも猶^{やう}予^よ成^成りがたしと。い^{地ハル}はせも果^はず。ヲツヲ、ゝゝゝ、いしくも紀平^{紀平}次^次申^{まう}シたり。是^是より都^都へ取^とつてかへし主^{しゅ}従^{じゆん}二^二(四十二オ) 人^人六^は波^は羅^ら

の。館へ切り入清盛父子が首取ルか。運尽なば討死して今の恥辱を雪べしいそふれやつと。勇氣の大將。かけ出さんとし給へば瀧口しばしと呼とゞめヤレ待ち給へ。匱忽。御存命を能クしつたる。娘は今が四苦八苦。死残りたる此親仁も。頼政といふ主なければ。他言せまじき誓の爲。腹かつさばいて見すれ共。それは益なき不忠の最期。真実人に吹聴せぬ誓言には。さいつ比子安の堂にて盗賊が。盗取つたる賽銭箱。疑念の暗る御饒別と。立寄つて挾箱。蓋を明ければ牛若丸立出給ふ御姿。コハ(四十二ウ)めづらしき対面と。義平公も紀平次も。歎きの中の悦びは。尽ぬ名残をふり捨て。お暇申ス。瀧口が泣ぬぞ泣にます鏡。影を見送る様は。露もかはかでしいほりと。しばみ切たる玉の緒や。つながれ寄たる縁組に。嫁御の輿は来世迄。すぐに送りし門の火も。葬礼の火と消残る。煙くらべん。鳥辺山。世はあだしの、手向草。老たる者はとゞまりて若木の。花の先立ツも。仏のしめし置かれたる。老生不定是なりと。有為転変の有様を。さとり。く

て立別れ都の。空へと帰りける(四十三才)

第三

輒斗水を得て九流に鱗を奮ふ。志を得る者は其勢に乘ルにしかずとかや。安芸守平の清盛待賢門の軍に打ち勝。義朝一ツ家を爰かしこに切取り。或は生捕かけ落トし自然と宇宙を掌に握り。威勢万里に搏て飛大鵬の沖がごとく。猶も源家の残党を草を分つてせんさくせんと。六波羅の記録所に主馬ノ判官盛久を始め。相伝恩顧の諸士をあつめ評議。取り々区々也。年木わる。老の姿も。(四十三ウ)三つ輪くむ。花の帽子も水色の。濁にそまぬ蓮葉や。

池の禪尼は附キ々の女房達チに案内させ。しづくと入給ひ。此度の戦ひに源氏の家門ちりぐに落行し其中に。兵衛ノ佐

頼朝を。弥平兵衛宗清が召捕し由先達て聞しが。其頼朝は過行しそなたの弟家盛に。面ざし恰好生うつしとの取沙汰。聞ヶば恋しさなつかしさ。我子がふたゝび蘇生逢と思へはおのづから。日比のうさも悲しさも忘れて心慰たし。一ト目達せて給はれと余義なき願ひ一筋に。思ひ入たる御風情。清盛眉間に皺をよせ。人相がよく(四十四才)似たればとて。朝敵の義朝が舁。御対面有つてしぜん不便の御志も出なば。殺すにも殺されず。助おかば後難も計りがたし。此義は御無用く〜と取りあへ給はぬ一ト口返答。にがり切つたる顔眺め。是迄そなたに此母が。何かに付けて一チ言も願ひし事はなければ共。子故に迷ふ親心。譬不便をかけたたり共さのみかいにも仇にもならふか。年寄つたれば侮つて子とても用ひぬ我力願ひ。も言ますまい是切りく。姉共サア供せいと。立帰らんとし給へばア、暫くく。さほど迄思し召シ入れし事達てとむるも心よからず。暫時の対面苦しかるまじ。ヤア〜者共。(四十四ウ)獄屋へ参り頼朝を目通りへ引出せ。ハット答て下モ部共御前ンを立て急行。

時しも有レ難波ノ次郎経遠。懸烏帽子に大紋袴。さはやかに出立ッて御前に畏り。尾張国の住人長田ノ庄司忠宗。義朝を討チ取り則チ首持参仕り。お次きにひかへ罷り有と器を御前ンに直し置キ。急ぎ忠宗を召シ出され。御恩賞遣はされ然るべし。古今無双の義朝なれば。風呂屋の内にて討ッたる次第大略咄し承りしが。比類なき働中々詞に尽されずと。むしろに肩持鬚眉口したり顔に相述べ。

禪尼引取り。イヤ其長田手柄にあらず。三代相伝の主(四十五才)を殺し。褒美を貪る大悪ク人。清盛の前へ呼出す事無用。其儘置クに追ッかへせと。気色かはつての給へば。イヤ是は尼公の仰共存ぜず。かほどの高名に御褒美を遣はされずば。

ひしは偽り。都を放れ近江路にかゝり。勢田の辺にて言合せ諸国へ落し其中カにも。二男太夫の進朝長は膝の口を篋深に射

られ。粟田口にて、鍬を拔捨。血を洗ふて保養すれ共、痛手なれば叶はず。終に青墓の宿にて生害す。まつた義朝は尾張ノ
国野間の内海にて。長田ノ庄司が討たれ共。心がゝりは悪源太汝がしらざる事有まい。是非いはねば目通りで拷問する。ナ
ア何とくと怒の面色。息烟立て波間をあばきつらぬく筋骨凹凸せり。(四十七才)